歴史の現在②

お米

こんなことを書いて実生活で煙たがられなければよいのだが、誰かと食事をした後、その人の茶碗にご飯粒が残っているのが気になってならない。食べきれなくて残したというものならまだしも、食べきるのが面倒でその必要さえ感じていないという雰囲気の残し方がある。きっとその数粒を食べたとしても大した栄養にはならないだろうし、残したところで大したゴミにもなるまい。しかしそうした「実質」とは別に、お米がそうやって扱われることに倫理的とも言うべき抵抗を感じる。食べ物全般に対してそういう意識はあるのだが（焼き魚をきれいに食べている人を見ると、それだけでその人が信頼に足る人物に見えてくる）、やはりなかでも米は特別なのかもしれない。日本の歴史において米ないし稲作が、信仰かそれに近いものとして重要視されてきたことはしばしば指摘される。例えば吉田健一の小説の登場人物は、「所が日本ていう国が米で出来ているんだよ、酒は米で作るし、この鮒鮨も米を焚いたものに漬けるんだし、米を手掛りにして行けば日本の風俗から建築に至るまで色んなことが解る筈なんだ」（『絵空ごと』河出書房新社 1971, pp.179-180）と語っているが、私の意識もその日本の伝統と連続しているのだろうか。

食べ物が大事であるのは日本に限らずというか人間に限らず動物全般に共通することだ。例えばよその国や地域では、出された食事を全部は食べきらずにすこし残すことが礼儀になっているところがあると聞くけれど、それも食べ物は大事であるという大前提があった上での一つの文化の現れ方だろう。それぞれの文化にそれぞれの形式がある。あるいはそれほど大雑把に文化の枠で区切らなくてもよいのかもしれない。久しぶりに田舎に遊びにきた孫にお祖母さんがご馳走を振るまい、孫が満腹で食べきれずにそれを残したとしても、お祖母さんは決してそれに憤慨したりせず、むしろ満足感を覚えるだろうし、その光景が十分に人間的であることは想像するに難くない。

私が茶碗に残った米粒が気になるのは、とりあえずは親の影響があると言えそうだ。子どもの頃、食卓でそう躾けられた気がする。記憶はおぼろげだが、大人になった今の客観的な考えを踏まえても、そうした躾けの現場で用いられた理屈は、①一生懸命お米を作ってくれたお百姓さんに申し訳ない、②世界には食べたくても食べられない人が大勢いる、といった辺りだったのではないかと思う。それは離れた場所にいる他者を想像するということだ。食に限らず、子どもを躾けることにおいて欠かせないテーマに違いない。けれども果たして子どもの頃の私は、実際にそうした理屈に納得して米粒を残さないようになったのだろうか。必ずしもそうとは言い切れないように思う。少なくとも現在、私が基本的に食べ残しをしないのは、その都度「離れた場所にいる他者」を想像しているからではないし、それは善い悪いの判断以前の当たり前のことになっている。子どもの頃の私は、どちらかと言えば、親が残すなと言うから残さず食べていたというほうが正確かもしれない。

理屈は別の理屈に負ける場合がある。離れた場所の他者を想像した結果、米はむしろ余っているのだから実際に食べられようが食べられまいがどんどん消費されたほうがよい、そのほうが経済が潤い、日本全体が豊かになる、という理屈にたどり着く可能性もある。そもそも昔は世間一般で食べ物が大事にされていたわけで、わざわざ①②のような理屈を言う必要はなかったはずだ。きっと親の世代もそれが当たり前なかで育ったし、それを遡れば米の信仰とも繋がるのかもしれない。そう考えると、誰かの茶碗の米粒がどうしても気になってしまうのも、歴史の現在を生きている証しだと思えてくる。